

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

| 作物名 | 病虫害名 | 予想発生量 < 平年比 (前年比) > | 作物名 | 病虫害名 | 予想発生量 < 平年比 (前年比) > |
|------|---|---|-----------------|--|---|
| イ ネ | 葉いもち ニカメイチユ (第 1 世代) | やや多 (やや多) 並 (並) | チ ヤ | カンザ ^レ ワハダ ^ニ | 山城: 並 (やや少) 丹波: 並 (並) 丹後: やや多 (やや少) |
| | ヒメトビ ^ウ ンカ 縞葉枯病 ツマク ^ロ ヨコ ^ハ イ イネミス ^ゾ ウムシ | やや少 並 少 (少) やや多 (やや多) | | チャノミドリヒメヨコ ^バ イ クワシロカイカ ^ラ ムシ | 山城: 並 (少) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (並) 山城: やや少 (やや少) 丹波: やや少 (やや少) 丹後: やや多 (並) |
| ナ シ | 黒斑病 黒星病 ハダニ類 | やや少 (やや少) やや多 (並) 並 (やや多) | 果菜類 | 疫病・ 褐色腐敗病 | 並 (並) |
| ブドウ | べと病 | やや多 (やや少) | キュウリ | べと病 | やや多 (並) |
| カ キ | 落葉病 うどんこ病 | やや少 やや多 (並) | キュウリ、 トウモロコシ | 斑点細菌病 | 並 (並) |
| カンキツ | ハダニ類 | 並 (やや少) | 果菜類 | うどんこ病 | 並 (並) |
| 果樹全般 | カメムシ類 | やや多 (並) | ネギ | さび病 ネギ ^ハ モク ^リ ハ ^エ ネギ ^ア サ ^ミ ウマ | やや多 (多) やや少 (やや少) やや多 (やや多) |
| チ ヤ | もち病 | 山城: やや多 (やや多) 丹波: やや多 (やや多) 丹後: 並 (並) | 野菜類 | アブラムシ類と モザ ^イ ク病 | 並 (並) |
| | チャノコカクモンハマキ | 山城: 並 (やや少) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (少) | 果菜類 | ハダニ類 アサ ^ミ ウマ類 | 並 (並) 並 (並) |
| | チャノホソカ ^ク | 山城: やや少 (並) 丹波: やや多 (並) 丹後: 並 (やや少) | アブラナ科 野菜 | コナガ | 並 |
| | チャノキイロアサ ^ミ ウマ | 山城: 並 (やや少) 丹波: やや少 (並) 丹後: 並 (やや少) | | | |

※平年とは過去10年の平均である。

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 予報の概要 | 1 |
| 予報本文 | 2 |
| 今後注意すべきその他の病虫害等 | 15 |
| 参考 I 近畿地方1か月予報 | 16 |
| II 用語の定義 | 16 |
| III 予報本文の見方 | 17 |
| IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について | 18 |

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、補植用苗での発生を認めていない（平年並）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|----------|-----|-----|
| 確認ほ場率(%) | 0.0 | 0.0 |

(2) 前年の穂いもちの発生量は平年比やや多かった（+）。

| 項目 | 昨年9月 | 平年値 |
|----------|------|------|
| 発病株率(%) | 4.8 | 2.4 |
| 確認ほ場率(%) | 30.0 | 12.2 |

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く（+）、日照時間は平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑の進展、胞子の形成量は高まる。

(2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。

(3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。

(4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。

(5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

(6) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ（アドレス <http://www.pref.kyoto.jp/byogai/index.html>）を参照のこと。

2 ニカメイチュウ（第1世代）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 前年8月は第2世代幼虫の発生を認めておらず（平年並）、越冬量は平年並と予想される。

| 項目 | 昨年8月 | 平年値 |
|---------|------|-----|
| 被害株率(%) | 0.0 | 0.0 |

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。

- (2) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は6月第4半旬頃である。
- (3) 山城地域平坦部の野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや少ない
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカの越冬虫数は平年比少なく(－)、確認ほ場率は平年比やや低い(－)。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|----------|------|------|
| 虫数(匹) | 0.1 | 0.9 |
| 確認ほ場率(%) | 12.5 | 34.0 |

*虫数は、20回振りすくい取り調査。

- (2) 昨年は、縞葉枯病の発生を認めていない(平年並)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) ツマグロヨコバイの越冬虫数は平年比少なく(－)、確認ほ場率は平年比低い(－)。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|----------|-----|------|
| 虫数(匹) | 0.1 | 3.8 |
| 確認ほ場率(%) | 6.3 | 34.3 |

*虫数は、20回振りすくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は平年比やや多い～多い(+)

| 地域 | 7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(匹) | |
|------|--------------------|-------|
| | 26年 | 平年値 |
| 京田辺市 | 78 | 50.0 |
| 亀岡市 | 377 | 103.7 |
| 京丹後市 | 98 | 56.9 |

- (2) 5月中旬現在、本田での発生量は平年比やや多い(+)

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|-----------|------|------|
| 食害株率(%) | 32.9 | 16.5 |
| 虫数(匹/25株) | 2.9 | 1.9 |
| 確認ほ場率(%) | 71.4 | 58.8 |

(3) 5月第2半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への誘殺数は京田辺で平年比多く(+)、亀岡で平年並、京丹後で平年比少ない(-)。

| 地域 | 4月1半旬～5月3半旬の誘殺数(匹) | |
|------|--------------------|------|
| | 本年 | 平年値 |
| 京田辺市 | 1 | 0.0 |
| 亀岡市 | 34 | 21.7 |
| 京丹後市 | 0 | 11.7 |

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫が土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用剤を使用しなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生するので、薬剤散布を行う。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年比やや少ない）（-）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|-----|
| 発病葉率(%) | 0.0 | 1.4 |

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。
- (2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|-----|
| 発病葉率(%) | 0.0 | 0.4 |

- (2) 丹後地域の一部のほ場で発生が報告されている (+)。
- (3) 向こう1か月の気温は高く (-)、降水量は多い (+) と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は15～25℃である。
- (2) 雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- (3) 赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|------|
| 発病葉率(%) | 0.0 | 0.01 |

- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は多い (+) と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は22～25℃である。
- (2) 5～6月に多雨であると多発生となる。
- (3) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は平年比少ない (-)。

| 項目 | 平成26年10月 | 平年値 |
|---------|----------|------|
| 発病葉率(%) | 2.0 | 15.6 |

- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は多い (+) と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 潜伏期間が長く、6月中旬から下旬に感染すると秋に多発する。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬の発生量は平年並。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|-----|
| 発病葉率(%) | 0.3 | 0.6 |

- (2) 前年10月の発生量は平年比やや少ない (-)。

| 項目 | 平成26年10月 | 平年値 |
|---------|----------|------|
| 発病葉率(%) | 32.7 | 51.6 |

- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は多い (+) と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が初発時期である。
- (2) 6～7月に多雨であると、若葉に被害が現れやすい。

6 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並（前年比やや多い）
カンキツ 平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、ナシでは発生を認めず（平年比やや少ない）（－）、カンキツの発生量は平年比やや少ない（－）であった。

| 作物 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|------|---------|-----|------|
| ナシ | 寄生葉率(%) | 0.0 | 0.8 |
| カンキツ | 寄生葉率(%) | 0.7 | 11.7 |

(2) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を使用した園では、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。
(2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので注意する。

7 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬量調査での平均生存虫数は平年（例年）並。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年(例年)値 |
|---------|--------------|------|---------|
| 京都市及び南丹 | 平均生存虫数(頭/地点) | 0.17 | 0.24 |
| 丹後 | 平均生存虫数(頭/地点) | 0.00 | 0.20 |

(2) 5月第2半旬現在、予察灯への誘殺数は京田辺、京丹後で誘殺を認めず（平年並）、亀岡で平年比多い（＋）。

| 場所 | 本年 | 平年値 |
|-----|----|-----|
| 京田辺 | 0 | 0.2 |
| 亀岡 | 2 | 0.0 |
| 京丹後 | 0 | 3.2 |

*誘殺数(頭)：5月第1半旬～第2半旬の合計値

(3) 5月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺で誘殺を認めず（平年並）、亀岡で平年比多い（＋）、京丹後で平年比やや多い（＋）。

| 場所 | 本年 | 平年値 |
|-----|-----|-----|
| 京田辺 | 0.0 | 0.1 |
| 亀岡 | 9.4 | 1.6 |
| 京丹後 | 1.4 | 0.2 |

*誘殺数(頭)：5月第1半旬～第2半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。

* 今後注意すべきその他の病害虫等は p 15 を参照

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波、丹後とも発生を認めていない（平年（例年）並）。
- (2) 前年10月の発生量は、山城、丹波で平年比やや多く（+）、丹後では発生を認めていない（例年並）。

もち病

| 地域 | 項目 | 昨年10月 | 平年値 |
|----|---------------------|-------|------|
| 山城 | 発病葉数/m ² | 0.05 | 0.00 |
| | 発生ほ場率(%) | 9.1 | 0.0 |
| 丹波 | 発病葉数/m ² | 0.30 | 0.40 |
| | 発生ほ場率(%) | 33.3 | 3.3 |
| 丹後 | 発病葉数/m ² | 0.00 | 0.00 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 0.0 |

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く（+）、日照時間は平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- (2) 気温20℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
- (3) 一番茶摘採後に病葉が認められる園や常発地では注意する。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年比少ない）

第1世代幼虫ふ化時期：

山城 5月第4半旬～5月第6半旬（平年比やや早い）
 丹波 5月第4半旬～5月第6半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|--------------------|------|------|
| 山城 | 綴葉数/m ² | 0.00 | 0.01 |
| | 幼虫数/m ² | 0.00 | 0.03 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 2.4 |
| 丹波 | 綴葉数/m ² | 0.00 | 0.02 |
| | 幼虫数/m ² | 0.00 | 0.02 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 1.7 |
| 丹後 | 綴葉数/m ² | 0.00 | 0.00 |
| | 幼虫数/m ² | 0.00 | 0.00 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 0.0 |

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年並、綾部で平年比やや多い（+）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月始めで、年4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
丹波 平年比やや多い（前年並）
丹後 例年並（前年比やや少ない）
第2世代幼虫ふ化時期：
山城 6月第2半旬～6月第3半旬（平年比やや早い）
丹波 6月第3半旬～6月第4半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で発生を認めていない（例年並）。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|--------------------|------|------|
| 山城 | 寄生芽率（％） | 0.0 | 2.5 |
| | 巻葉数／m ² | 0.2 | 0.4 |
| | 発生ほ場率（％） | 15.8 | 23.0 |
| 丹波 | 寄生芽率（％） | 0.0 | 0.1 |
| | 巻葉数／m ² | 1.2 | 0.8 |
| | 発生ほ場率（％） | 16.7 | 10.3 |
| 丹後 | 寄生芽率（％） | 0.0 | 1.0 |
| | 巻葉数／m ² | 0.0 | 0.0 |
| | 発生ほ場率（％） | 0.0 | 14.3 |

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年並、綾部で平年比やや多い（＋）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治、綾部ともに平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が重なるため、被害が大きくなるので注意する。

4 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年並）
丹後 例年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比少なく（－）、丹後で例年並。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|-------------|------|------|
| 山城 | 寄生・被害芽率 (%) | 3.3 | 8.0 |
| | 発生ほ場率 (%) | 66.7 | 56.8 |
| 丹波 | 寄生・被害芽率 (%) | 0.0 | 1.6 |
| | 発生ほ場率 (%) | 0.0 | 36.5 |
| 丹後 | 寄生・被害芽率 (%) | 0.0 | 1.4 |
| | 発生ほ場率 (%) | 0.0 | 39.3 |

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年比多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。
- (4) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年並、丹後で例年比やや多い(+)。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|-----------|------|------|
| 山城 | 寄生葉率 (%) | 0.8 | 1.2 |
| | 寄生虫数/100葉 | 1.9 | 4.6 |
| | 発生ほ場率 (%) | 21.1 | 20.8 |
| 丹波 | 寄生葉率 (%) | 0.0 | 0.2 |
| | 寄生虫数/100葉 | 0.0 | 0.4 |
| | 発生ほ場率 (%) | 0.0 | 5.0 |
| 丹後 | 寄生葉率 (%) | 2.5 | 0.9 |
| | 寄生虫数/100葉 | 3.5 | 5.6 |
| | 発生ほ場率 (%) | 25.0 | 21.4 |

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年比多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力が高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城、丹波、丹後ともに平年（例年）並。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|-------------|------|-----|
| 山城 | 寄生・被害芽率 (%) | 0.2 | 0.2 |
| | 発生ほ場率 (%) | 11.1 | 7.4 |
| 丹波 | 寄生・被害芽率 (%) | 0.0 | 0.2 |
| | 発生ほ場率 (%) | 0.0 | 8.3 |
| 丹後 | 寄生・被害芽率 (%) | 0.0 | 0.0 |
| | 発生ほ場率 (%) | 0.0 | 0.0 |

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。
- (3) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹後 例年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年比やや少なく（－）、丹後で例年比やや多い（＋）。

| 地域 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|----|-----------|------|------|
| 山城 | 寄生株率 (%) | 5.8 | 16.6 |
| | 発生ほ場率 (%) | 47.4 | 59.6 |
| 丹波 | 寄生株率 (%) | 0.8 | 9.1 |
| | 発生ほ場率 (%) | 16.7 | 43.3 |
| 丹後 | 寄生株率 (%) | 3.8 | 12.0 |
| | 発生ほ場率 (%) | 25.0 | 21.4 |

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。
- (3) プルートMCを散布した茶園では、薬剤散布の必要はない。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

* 今後注意すべきその他の病害虫等は p 15 を参照

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年比多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水によりまん延することが多いので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。

(2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|-----|
| 発病葉率(%) | 0.7 | 0.6 |
| 発病株率(%) | 1.3 | 1.1 |

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年比多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 曇雨天が続くと初発生及びまん延期が早くなる。

(2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 キュウリ・トウガラシ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年並）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|----------|-----|-----|
| 発病株率(%) | 0.0 | 0.0 |
| 発病ほ場率(%) | 0.0 | 0.0 |

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年比多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から入って発病する場合が多い。

(2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。

(3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

4 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、ナスとキュウリで発生を認めていない（平年並）。

| 作物 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|------|---------|-----|-----|
| ナス | 発病株率(%) | 0.0 | 0.0 |
| キュウリ | 発病株率(%) | 0.0 | 0.1 |

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。

(2) トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|----------|------|-----|
| 発病株率(%) | 1.0 | 0.6 |
| 発病ほ場率(%) | 25.0 | 5.4 |

（２）向こう１か月の気温は高く、降水量は平年比多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）春から初夏に発生が多く、九条ネギは発病しやすい。

6 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、アブラムシ類の発生量はナスで平年比やや少なく（－）、キュウリ、キャベツ、ネギで平年並。

| 作物 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|------|-------------|------|------|
| ナス | 寄生虫数(頭/葉) | 0.17 | 0.35 |
| | 寄生葉率(%) | 12.0 | 18.5 |
| キュウリ | 寄生虫数(頭/葉) | 0.03 | 0.12 |
| | 寄生葉率(%) | 3.3 | 9.3 |
| キャベツ | 寄生虫数(頭/10株) | 6.3 | 10.5 |
| | 寄生株率(%) | 31.0 | 26.3 |
| ネギ | 寄生虫数(頭/株) | 0.01 | 0.05 |
| | 寄生株率(%) | 1.0 | 3.9 |

（２）５月第３半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年比やや少ない（－）。

（３）向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量は平年比多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。

（２）通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。

（３）高温、乾燥が続くと発生が多くなる。

（４）キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

7 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、ナス、キュウリともに発生を認めていない（平年並）。

| 作物 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|------|-----------|------|------|
| ナス | 寄生虫数(頭/葉) | 0.00 | 0.03 |
| | 寄生葉率(%) | 0.0 | 0.9 |
| キュウリ | 寄生虫数(頭/葉) | 0.00 | 0.02 |
| | 寄生葉率(%) | 0.0 | 1.4 |

（２）向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量は平年比多い（－）と予想され

ている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温、乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、ナス、キュウリでの発生量は平年並。

| 作物 | 項目 | 本年 | 平年値 |
|------|-----------|------|------|
| ナス | 寄生虫数(頭/葉) | 0.01 | 0.04 |
| | 寄生葉率(%) | 0.5 | 2.8 |
| キュウリ | 寄生虫数(頭/葉) | 0.40 | 0.28 |
| | 寄生葉率(%) | 24.0 | 17.5 |

- (2) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は平年比多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。

9 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、キャベツでの発生量は平年並。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|-------------|-----|-----|
| 幼虫・蛹数(/10株) | 0.9 | 1.1 |
| 寄生株率(%) | 8.0 | 8.0 |

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、亀岡で平年並、丹後で平年比少ない（－）。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年比多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は平年比少ない（－）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|-----|------|
| 被害株率(%) | 4.0 | 56.2 |
| 被害度 | 1.0 | 18.7 |

- (2) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は平年比多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が少雨の年に多発しやすい。

- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は、20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

1.1 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在の発生量は平年比やや多い（+）。

| 項目 | 本年 | 平年値 |
|---------|------|------|
| 被害株率(%) | 98.0 | 55.2 |
| 被害度 | 27.0 | 21.9 |

- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年比多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。
- (4) 本虫は昨年6月以降、府内で発生を確認しているネギえそ条斑病を媒介する。
- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
詳細は京都府病虫害防除所ホームページの情報
(アドレス<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyuhoh20140702.pdf>)を参照のこと。

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

果樹

1 カキノヘタムシガ・カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

一番茶期に被害を受けた地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

2 チャトゲコナジラミ

平成27年5月中旬の巡回調査では、府内全域で成虫の飛翔している茶園を確認した。多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (5月16日から6月15日までの天候見通し)

平成27年5月14日
大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

| | 低い(少ない) | 平年並 | 高い(多い) |
|---------|---------|-----|--------|
| 気 温 | 10 | 40 | 50 |
| 降 水 量 | 20 | 30 | 50 |
| 日 照 時 間 | 40 | 40 | 20 |

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は高く、降水量は多く、日照時間は平年並または少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

| | | | | | | |
|-----|------|-------|--------|--------|--------|--------|
| | 第1半旬 | 第2半旬 | 第3半旬 | 第4半旬 | 第5半旬 | 第6半旬 |
| 各月の | 1～5日 | 6～10日 | 11～15日 | 16～20日 | 21～25日 | 26～最終日 |

2 発生量 --- 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 --- 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

| | |
|------|-----------------|
| 平年並 | 平年値を中心として前後2日以内 |
| やや早い | 平年値より3～5日早い |
| やや遅い | 平年値より3～5日遅い |
| 早い | 平年値より6日以上早い |
| 遅い | 平年値より6日以上遅い |

2) 量(発生量、発生面積等)

| | |
|-------|----------------------------------|
| 平年並 | 平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量 |
| やや多い | 「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量 |
| やや少ない | 「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量 |
| 多い | 「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量 |
| 少ない | 「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量 |

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

| 地域 | 項目 | 4月の調査結果 | 4月 平年値 |
|----|----------|---------|--------|
| 山城 | 綴葉数(/㎡) | 3.0 | 0.1 |
| | 幼虫数(/㎡) | 0.5 | 0.0 |
| | 発生ほ場率(%) | 22.7 | 3.7 |
| 丹波 | 綴葉数(/㎡) | 0.0 | 0.5 |
| | 幼虫数(/㎡) | 0.0 | 0.0 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 11.7 |
| 丹後 | 綴葉数(/㎡) | 0.0 | 0.0 |
| | 幼虫数(/㎡) | 0.0 | 0.0 |
| | 発生ほ場率(%) | 0.0 | 0.0 |

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(A DI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようにしましょう。

1 使用方法が変更された農薬

| 有効成分 (変更年月日) | 主な商品名 | 変更内容※ |
|-------------------------|--|--------------------------------------|
| アセフェート (平成26年11月17日) | オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤 | 適用作物削除 適用時期変更 使用回数変更 希釈倍率変更 |
| ジメトエート (平成27年2月4日) | ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤、ベジホン乳剤 | 適用作物削除 |
| フルバリネート (平成27年2月18日) | マブリック水和剤20、マブリックEW、マブリックジェット | 適用作物削除 適用時期変更 |
| フェナリモル (平成27年2月18日) | ルビゲン水和剤、スペックス水和剤 | 適用作物削除 |
| NAC (平成27年2月18日) | マイクロデナポン水和剤85、デナポン水和剤50 | 適用作物削除 |

(平成27年3月23日現在)

2 今後使用方法が変更される予定の農薬

| 有効成分 (変更予定年月日) | 主な商品名 | 変更内容※ |
|---------------------|--|--------|
| カルボスルファン ベンフラカルブ | ガゼット粒剤、アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤 オンコル粒剤、オンコル粒剤5、オンコル粒剤1 ジャッジ箱粒剤、オンコルスタークル粒剤 オンコルマイクロカプセル、オンダイアエース粒剤 ホームガーデン粒剤、ガーデンホスピタル粒剤 | 適用作物削除 |
| シロハトリン | サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、ビリーブ水和剤 | 適用作物削除 |

(平成27年3月23日現在)

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます(要登録)。また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

| 農業改良普及センター 電話番号一覧 | | |
|-------------------|------------|--------------|
| ・京都乙訓 | 農業改良普及センター | 075-315-2906 |
| ・山城北 | 農業改良普及センター | 0774-62-8686 |
| ・山城南 | 農業改良普及センター | 0774-72-0237 |
| ・南丹 | 農業改良普及センター | 0771-62-0665 |
| ・中丹東 | 農業改良普及センター | 0773-42-2255 |
| ・中丹西 | 農業改良普及センター | 0773-22-4901 |
| ・丹後 | 農業改良普及センター | 0772-62-4308 |

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－